John Greenleaf Whittier

彼の生涯と作品

月　地　冬　二

はじめに

ニュー・イングランド文学は Jonathan Edwards の時代以来不振の状態にあったが19世紀の初葉から次第にその文学的卓越が確立してきた。多くの要素がその確立の要因をなしているが，その一は宗教上では Puritanism に対する反動として起った Unitarianism の台頭である。

Puritanism は本来偏狭で人間性を無視したきびしいものであった。これに対して人間性の尊厳，怒りの神に対して愛の神を説いたのが Unitarianism である。

此の Unitarianism と結びついた思想が Transcendentalism で其の根源は独乙の Kant を中心とする理想主義の哲学である。これが直接に，或は間接にイギリスを通してニュー・イングランドに伝わってきた。これが所謂 Transcendentalism でその中心的存在は Concord の Ralph Waldo Emerson である。

又一方 Boston 郊外の Cambridge には Henry Wadsworth Longfellow, Oliver Wendel Holmes, James Russel Lowell の作家達が出た。何れも Harvard 大学の教授で，教養ある学者であった。

Whittierは此等の作家と異り紳士としても学者としても育てられなかった。彼は生粋のニュー・イングランド人であった。田園に生れ田園に育ち，始めから労働者であった。

Whittierは正直であり，温和で恭倹であったが，不正に対しては甚だしく憎悪した。彼に就て忘れてならぬことは彼の宗教である。彼はクエーカー派の信者であった。此の信仰が彼をして壮年期の精力の大部分を奴隷解放運動のために捧げしめたといっても過言ではない。

奴隷解放運動が成就するや彼は戦闘的詩人から温和にして静穏な詩人となった。

本篇では Whittier の生涯をたどり，その作品を概観して彼をしのぶこととする。

I 生　涯

(1) 生いたち

Whittier (1807—92) はクエーカー教徒の両親の子として Massachusetts 州 Haverhill に生れた生粋のニュー・イングランド人で，その土地の自然と物とをこよなく愛した。彼は正規の教育は僅かしか受けなかったが，学校教育から得られなかったものを本から学んだ。William Penn その他の著書によって彼は Quakerismの本質即ち形式的な信条の盲目的固守よりも自己完成の為に努力することの必要性，新約聖書の愛のキリストの重要性，社会的平等の実践，人生の凡ての状況を精神面から考察する事の必要性等を学んだ。此等の根本的な思想が後年彼をして奴隷解放運動に赴かしめ，又すばらしい宗教詩を発表する原動力になった。

Whittierの田園生活の経験も彼の人格形成に寄与した。彼の父の生活は窮乏と云う程では無いが，どうやら借金せずに暮せる程度であった。凡ての農家の少年のように彼は植林，収穫物の取り入れ，乳しぼり等の仕事を引き受けなければならなかった。此のような仕事は虚弱な彼の体力には過重であった。17才の時彼はすっかり健康を害して仕舞った。農場の重労働は不適当なことを自覚して，彼は少年時の詩の中でこんなことを歌っている。

"And must I always swing the flail,
And help to fill the milking pail?

I wish to go away to school;
I do not wish to be a fool."(1)

上述のような農場に於ける労働の激しさや環境の地方的偏狭にも拘らずWhittierは田園生活から種々の利益を得た。荒地を開墾せんとする父の断固たる決意と Jefferson の民主主義に対する彼の誇りとは，少年Whittierの特徴となった。彼の叔父は，少年の彼の心に Haverhill 地方の美しい自然に対する愛を刻みつけた。此の自然愛を彼は終生忘れることはなかった。

(2) Burns の影響

1821年に学校教師 Joshua CoffinがWhittier家を訪問して，持ってきた一巻の詩集からBurnsの詩，「美しきヅーン川」'Bonnie Doon,'「ハイランド・メリー」'Highland Mary,'「オールド・ラング・サイン」'Auld Lang Syne' を読んできかせた。少年Whittierは深い感動を受けた。此の事は彼の生涯に於ける特筆すべき大きな出来事であった。此等は彼が今までに聞いた最初の詩であり，之を契機として，自らも詩を作ったり，物語を想像するようになった。

Whittier は Burns に彼と同じような少年，余り教育も受けず農場の重労働のために健康を害した少年，不寛容と偽善を嫌悪した少年を見出した。Burns は民衆に訴えた詩人であり，人間の尊厳及び社会的平等に対する信念，自然に対する愛を表現した。すべて此等のテーマは又Whittierのテーマでもあった。後年に至って彼は名作「雪ごもり」"Snow-Bound" を書いたが，此は正にBurnsの"The Cotter's Saturday Night" に比すべき傑作である。

(3) Garrison との出会

Whittierの姉 Mary は日頃弟の詩作をはげましていたが，彼の作品の中のすぐれた詩，"The Exile's Departure" を弟には内密で The Newbury-port Press に送った。此の編集者William Lloyd Garrison は人道主義者であり改革者であった。彼は此を読んで同誌にのせた。Garrison は更に Whittier に乞うて，今一つの詩 "The Deity" を得て，此に論評を加えて同誌に発表した。

"His poetry bears the stamp of true poetic genius, which, if carefully cultivated, will rank him among the bards of his country."(2)

Garrison は Whittier を農場に訪ねてみると，彼は納屋の中で四つんばいになって卵を探している所だった。Garrison は Whittier の両親を説き，彼に学校教育を受けさせるように願った。然し彼の父は「詩ではめしは食へぬ」と云って之を拒絶した。だが息子の詩も次第に認められて"The Haverhill Gazette"に掲げられ，その編集者の説得も効を奏して彼の父はしぶしぶ此に賛同するに至った。かくて Whittier は短期間ではあるが開校した許りのHaverhill Academy に通うことを許された。彼は一足8仙のスリッパを作る事により，その金で二学期間通学する事が出来た。此の頃彼は Mary Emerson Smith と云う少女を知った，彼女は彼の親戚の娘であるが，此の少女に深い愛情を寄せていた。不幸なことに少女は他の男と結婚したため，彼は精神的に大打撃を受けた。彼女は恐らく彼の傑作「私の遊び友達」"My Playmate" や「学校時代」"In School-Days" のヒロインであろう。

(4) 奴隷解放運動

Garrisonは1833年にWhittierに対して奴隷解放運動に参加するよう熱心に呼びかけた。彼はためらうことなく此に応じた。John Woolman 以来クエーカー派の宗徒間で奴隷解放を実践していたクエーカーの精神が Whittier を動かして此の運動に参加せしめる原動力となったと申しても過言ではない。

今やWhittierは田園生活，美しい自然，古き伝説の魅力を捨て，更に大いなる仕事に携ることになった。

彼は25歳の時から南北戦争の終結まで30年間最も活動的な努力を奴隷解放のために捧げた。

彼は日頃奴隷廃止の目的を達成するためには，暴力という武器を用いず，理性と真理の武器を用いるべきだと主張した。彼は奴隷制度が黙許される限り，如何なる平和も存在し得ない，と確信した。何故なれば自由と奴隷制度とは両立し得ないからである。

1834年の夏Whittierは「反奴隷制度協会の集会のために書ける賛歌」"Hymn Written for the Meeting of the Anti-Slavery Society"を書いた。此は人間愛のメッセージであり，凡ゆる人々の心に訴え，平和の到来の速やかならんことを祈念したものである。

「天からの火を以て打たれし如く
奴隷の鎖が砕けて地に落ち，
正しき人々の栄ある自由が
彼の束縛されたる魂に与へらる時」

"When, smitten as with fire from
Heaven,
The captive's chain shall sink in dust;
And to his fettered soul be given
The glorious freedom of the just."

又Whittierは「奴隷船」を発表した。奴隷船の船艙に奴隷達は閉じ込められ，男も女も子供達までが，不潔な所に鎖でつながれ，死んだ者は白人の水夫によって海中に投げ込まれた。

「死んだ犬共は皆片づいたか。」
そのもつれた唇を通して彼はどなった。
「盲目の奴等は死んだも同然だ，
さあ，船を軽くしよう。」

"Are all the dead dogs over?"
Growled through that matted lip;
"The blind ones are no better.
Let's lighten the good ship."

「基督者奴隷」"The Christian Slave"も奴隷詩の中で有名なものである。

「我が哀な奴隷は痛める眼をあげて
基督の御社を仰ぐも甲斐なし。
其の儀式は奴隷の市価を高め
彼の鎖を固くするのみなり。」

"But our poor slave in vain
Turns to the Christian shrine his
aching eyes,
Its rites will only swell his market price,
And rivet his chain."

彼の反奴隷制度に関する詩の中で最も有名なものは，奴隷解放が実現された折歌った「神には讃美」"Laus Deo"及びIchabod〔ikəbɔd〕であろう。後者は旧約聖書サムエル前書4章20節（栄栄(さかえ)イスラエルを去りぬといいて其の子イカボデ（栄なし）と名づく）からとった名で，Daniel Webster が逃亡奴隷取締法に賛意を表し，奴隷制度反対運動を無用のものときめつけたのに対する反駁の詩である。

「他はすべて去れり　彼の巨眼より
魂は去りたり　人にして信仰を失ひ
名誉亡ぶるときは
彼は死にたるも同然なり。

されば其上の敬意をば
今は空しき彼の名誉の上に捧げよ。
眼をそむけ　歩みをかへして
彼が恥をおおい隠せ！」

"All else is gone ;from their great eyes
The soul has fled:
When faith is lost, when honor dies,
The man is dead!

Then, pay the reverence of old days
To his dead fame;
Walk backward, with averted gaze,
And hide the shame!"

此の詩は英国人 Browning が老 Wordsworth を諷した詩「失われた指導者」"The Lost Leader"に比せられる程で，Webster に対する憤りを抑えようと努めることがいよいよ其の憤りの激しさを如実に示し，読者の胸にせまるものがある。

熱心な奴隷廃止論者であり，自由のために戦った William Lloyd Garrison をたたえて，

「暴虐の鉄の手の下に呻く所の
人々の擁護者」

"Champion of those who groan beneath
Oppression's iron hand"

とも歌い，最後の勝利を得るまで大胆な立場を固守するように彼をはげました。

最後に Whittier は次のように歌って詩を結んでいる。

「されば殉教者の熱意をこめて前進せよ
而して汝の確かなる報酬を待て，
人が人に対して最早膝を屈する事なく
ひとりの主なる神すべたもうとき。」
"Then onward with a martyr's zeal,
And wait thy sure reward
When man to man no more shall kneel,
And God alone be Lord."

(5) 後半生

1864年9月に Whittier は彼の最も愛する妹を失った。彼女の死は詩人の心に大いなる打撃を与えた。一年後に書かれた「久遠の愛」"The Eternal Goodness"には彼の敬虔なる信仰が表わされている。

「雪ごもり」"Snow-Bound" は彼の書いた詩の中の最大傑作であり，南北戦争後数ケ月して作られた。此の詩は彼の生前に於て最も親しかった二人の女性—彼の母と妹への追憶の詩である。Haverhill の農家をとりまく目も暗む許りの吹雪の激しさ，屋内に於ける肉親の温い集い亡き人々に対する追憶がこまやかに描かれている。此の頃が彼の詩的円熟の時期であり，以上の外に，"Telling the Bees," "Among the Hills," "Maud Muller," "Skipper Ireson's Ride" の傑作が生れた。

彼は Amesburyに居を定めて健康の許す限り New Hampshire の山々や附近の湖畔を訪ね，数多くの詩を作つた。これは Wordsworth がCumberland の湖畔地方にその詩材を求めて自然を歌ったのに類似している。

此の頃から彼の没する迄の期間に Whittier の名声は大いに揚り，その出版物は満足すべき売れゆきを示した。然し一方に於て未知の訪問客の来訪に当惑した。

「私は丈夫なはがねのような固い筋肉の農夫が羨ましい。私は見知らぬ人々と詩を語るよりは，薪でも切りたい。」
"I envy the stout, steel-muscled farmers, I would rather chop wood than to talk poetry with strangers."(3)

彼の讃美者や親友達は温く彼をとりまき，援助したにも拘らず彼は時折り言いようもない寂しさにおそわれた。

「私は懐しい昔からの顔なじみに会う事が出来なくてとても寂しく，返らぬ日の事を考える。昔の友達や最も親しい親族も皆逝ってしまった。只自然界の不朽の美しさだけがいつも変らぬままである。
"I miss sadly the dear old faces, and think of days that are no more. Old friends and closest relatives were gone. Only the everlasting beauty of outward Nature remains unchanged."(4)

Whittier は気のむくままに静かに余生を過した。親しい友達と会ったり，読書したり，又詩作したりした。彼は永い間神経痛に悩んでいた。晩年に於ては衰弱も加わり，1892年 New Hampshire に於て85年の生涯をとじた。

Ⅱ 作　　品

Whittierの特色は，彼が徹頭徹尾ニュー・イングランドに生れニュー・イングランドに育ち，その土地の風物や素朴な農民生活の哀歓を率直に美しく歌ったことである。

Whittierは「作家は先ず第一に彼自身でなければならない，そして主題は作家自身の経験と直接の関係を持たねばならぬ」と確信した。

19世紀後半の Harvad 大学を中心とする作家たち，Henry Wadsworth Longfellow, Oliver Wendel Holmes, James Russel Lowell は何れも優れた学者であったが，Whittierは正規の学校教育を僅かしか受けなかった。然し貧困，激しい労働，田園生活の経験，読書が彼をば学校教育以上に教育したと云っても過言ではないと思う。

Whittierは非国教徒であるクエーカーの信仰の中に育った。小年時代Burnsの素朴な詩から霊感を受けた。又 William Lloyd Garrison に認められ彼の勧めに従て，奴隷解放運動に参加し，壮年期の30年をこれに捧げ数々の奴隷制度反対詩をつくった。

彼の詩には "The Slave Ship," "Ichabod," "Laus Deo!" のような奴隷廃止運動に関するも

のや "My Playmate," "In School-Days" のような情趣あふれるものもある。わけて「雪ごもり」" Snow-Bound" はニュー・イングランドの信仰深い農民の冬に閉ざされた生活を素朴に歌ったもので彼の代表作である。

詩人の詩は夥しい数にのぼるのが，今は僅かながら特色ある詩を掲げて之を味読することにする。

ANTI-SLAVERY POEMS

THE FAREWELL

OF A VIRGINIA SLAVE MOTHER TO HER DAUGHTERS SOLD INTO SOUTHERN BONDAGE

GONE, gone,—sold and gone,
To the rice-swamp dank and lone,
Where the slave-whip ceaseless swings,
Where the noisome insect stings,
Where the fever demon strews
Poison with the falling dews,
Where the sickly sunbeams glare
Through the hot and misty air;

Gone, gone,—sold and gone,
To the rice-swamp dark and lone,
From Virginia's hills and waters;
Woe is me, my stolen daughters!

Gone, gone,—sold and gone,
To the rice-swamp dank and lone.
There no mother's eye is near them,
There no mother's ear can hear them;
Never, when the torturing lash
Seams their back with many a gash,
shall a mother's kindness bless them,
Or a mother's arms caress them.

Gone, gone,—sold and gone,
To the rice-swamp dank and lone,
From Virginia's hills and waters;
Wos is me, my stolen daughters!

Gone, gone,—sold and gone,
To the rice-swamp dank and lone.

奴隷制度反対詩

別れの言葉

ヴァージニアの奴隷の母が南部へ奴隷として売られた娘に与へたる

行ってしまった行ってしまった—売られて行ってしまった—じめじめした寂しい稲田へ
奴隷の笞が絶えず揺れるところへ
有害な昆虫が刺すところへ
悪魔のような熱病が毒気を
おりてくる露と一緒にふりまくところへ
陰気な日光が暑い霧深い空気
を通してぎらぎら輝くところへ。

行ってしまった行ってしまった—売られて行ってしまった—じめじめしたさびしい稲田へ
ヴァジニアの山や川から
ああ私の盗まれた娘達よ！

行ってしまった行ってしまった—売られて行ってしまった—じめじめした淋しい稲田へ。
母の眼は彼等の近くになく
母の耳は彼等の言葉を聞くことが出来ない。
拷問の笞が彼等の背中に
多くの切傷をしるす時に
母の親切は彼等を祝福する事は出来ない。
母の腕も彼等を抱く事は出来ない。

行ってしまった行ってしまった—売られて行ってしまった—じめじめしたさびしい稲田へ
ヴァージニアの山や川から
ああわたしの盗まれた娘たちよ！

行ってしまった行ってしまった—売られて行ってしまった—じめじめした淋しい稲田へ

Oh, when weary, sad, and slow,
From the fields at night they go,
Faint with toil, and racked with pain,
To their cheerless homes again,
There no brother's voice shall greet them;
There no father's welcome meet them.

ああ疲れて悲しくゆっくりと
夜稲田から労働でふらふらになり苦しみに
さいなまれて再びあじきない収容所にもどる時
母の声が彼等を暖く迎へることもあるまい。
父の心からの歓迎が彼等を迎へる
こともあるまい。

Gone, gone,—sold and gone,
To the rice-swamp dank and lone,
From Virginia's hills and waters;
Woe is me, my stolen daughters!

行ってしまった行ってしまった—売られて行ってしまった—じめじめした淋しい稲田へ
ヴァージニアの山や川から。
ああ私の盗まれた娘たちよ

Gone, gone,—sold and gone,
To the rice-swamp dank and lone.
From the tree whose shadow lay
On their childhood's place of play;
From the cool spring where they drank;
Rock, and hill, and rivulet bank;
From the solemn house of prayer,
And the holy counsels there;

行ってしまった行ってしまった—売られて行ってしまった—じめじめした淋しい稲田へ！
彼等の子供時代の遊び場に
影をおとしたその木から
彼等ののどを潤した冷い泉から
岩や小山や小川の堤から
神聖なる戒告を受けたる厳かな教会から。

Gone, gone,—sold and gone,
To the rice-swamp dank and lone,
From Virginia's hills and waters;
Woe is me, my stolen daughters!

行ってしまった行ってしまった—売られて行ってしまった—じめじめした淋しい稲田へ
ヴァージニアの山や川から
ああ私の盗まれた娘たちよ！

Gone, gone,—sold and gone,
To the rice-swamp dank and lone;
Toiling through the weary day,
And at night the spoiler's prey.
Oh, that they had earlier died,
Sleeping calmly, side by side,
Where the tyrant's power is o'er,
And the fetter galls no more!

行ってしまった行ってしまった—売られて行ってしまった—じめじめした淋しい稲田へ
終日の労働につかれはて
夜は夜で略奪者のえじきになる。
ああ彼等がもっと早く死んでしまったら
相並んで静かに眠ってしまったら
暴君の権力も届かぬところに
足かせの拷問ももはやないところに！

Gone, gone,—sold and gone,
To the rice-swamp dank and lone,
From Virginia's hills and waters
Woe is me my stolen daughters!

行ってしまった行ってしまった—売られて行ってしまった—じめじめした淋しい稲田へ
ヴァージニアの山や川から
ああ私の盗まれたる娘たちよ！

Gone, gone,—sold and gone,
To the rice-swamp dank and lone.

行ってしまった行ってしまった—売られて行ってしまった—じめじめした淋しい稲田へ。

By the holy love He beareth;
By the bruisëd reed He spareth;
Oh, may He, to whom alone
All their cruel wrongs are known,
Still their hope and refuge prove,
With a more than mother's love.
Gone, gone,—sold and gone,
To the rice-swamp dank and lone,
From Virginia's hills and waters;
Woe is me, my stolen daughters!

聖なる愛によって主はしのびたもう。
痛める葦に対して主は恵みたもう。
ああ主よ! 彼等のむごき虐待を知りたもう主よ!
願わくは常に彼等に希望と
保護を与へたまわんことを,
母の愛に勝る愛を以て！
行ってしまった行ってしまった—売られて行ってしまった—じめじめした淋しい稲田へ
ヴァージニアの山や川から
ああ私の盗まれたる娘たちよ！

1865年1月31日奴隷制度廃止の修正案が議会を通過した時奴隷廃止論者としての彼の本来の目的は達成された。

不朽の名作 "Laus Deo!" は Whittier が Amesbury のフレンド派の教会堂に居た折修正案の通過を告げる鐘や大砲の響に耳を傾けた時に彼の心に浮んだものである。

LAUS DEO!

It is done!
Clang of bell and roar of gun
Send the tidings up and down.
How the belfries rock and reel!
How the great guns, peal on peal,
Fling the joy from town to town!

Ring, O bells!
Every stroke exulting tells
Of the burial hour of crime.
Loud and long, that all may hear,
Ring for every listening ear
Of Eternity and Time!

Let us kneel:
God's own voice is in that peal,
And this spot is holy ground.
Lord, forgive us! What are we,
That our eyes this glory see,
That our ears have heard the sound!

For the Lord
On the whirlwind is abroad;

神を賛えよ

そは果されたり！
鐘の響きと大砲のとどろきが
喜びのおとづれを此方彼方に送る。
如何に鐘楼のゆれ動くことよ！
如何に大砲の打ちつづくとどろきが
町より町へ歓喜を投げることよ！

鳴りひびけおお鐘の音よ！
一撞き毎に鐘の音は
罪の埋葬時を歓喜しつつ告げる。
皆の耳朶を打つ如く高らかに長く
永劫にあらゆる心ある者の耳に
鳴りひびけ！

跪かん！
神の御声は其の鐘の音にあり
而して此の地こそ聖地なれ。
主よ我等を赦したまえ！
我等は何者ぞや
我等まのあたりこの栄光を見
まのあたりこの鐘の音をきくとは！

何故なれば主は
旋風にのりて出で給い

In the earthquake He has spoken;
He has smitten with His thunder
The iron walls asunder,
And the gates of brass are broken!

地震のうちに語りたまえり。
主は雷もて鉄壁を強く打ちたまえば
真鋳の扉はやぶられたり！

Loud and long
Lift the old exulting song;[5]
Sing with Miriam by the sea,
He has cast the mighty down;
Horse and rider sink and drown;
"He hath triumphed gloriously!"[6]

高らかに長く
そのかみの喜びの歌声をあげよ！
かのミリアムと共に海べに歌え，
主は力強き者を投げ倒したまい
騎手は馬もろとも沈みておぼれ
「主は耀かしく捷ち給へり！」

Did we dare
In our agony of prayer,
Ask for more than He has done?
When was ever His right hand
Over any time or land
Stretched as now beneath the sun?

我等は苦悶の祈りのさなかに
主がなしたまえる以上のものを
敢へてもとめしか。
かって主の正しき御手が何時(いつ)いかなる時
いかなる土地に太陽のもと
今の如くのびしことありしか。

How they pale,
Ancient myth and song and tale,
In this wonder of our days,
When the cruel rod of war
Blossoms white with righteous law,
And the wrath of man is praise![7]

古の神話も歌も物語も如何に
蒼白に見えることよ，
我等の此の驚異の時代にありて
戦の残酷なる笞も
正しき法のために白き花をひらき
人の怒も賛美となるとき！

Blotted out!
All within and all about
Shall a fresher life begin;
Freer breathe the universe
As it rolls its heavy curse
On the dead and buried sin!

罪は消滅せり！
内外(うちと)のあらゆるものは
清新なる生活を営み始めん。
宇宙は更に自由に息づかん
死して埋められたる罪の上に
その重苦しき呪をまろばしゆく時

It is done!
In the circuit of the sun
Shall the sound thereof go forth.
It shall bid the sad rejoice,
It shall give the dumb a voice,
It shall belt with joy the earth!

そは果されたり！
日がみ空をめぐるとき
その喜びの音は鳴り出でん。
そは悲しめる者に喜びをつげ
もの云えぬ者に声を与え
地球を歓喜もてつつまん！

Ring and swing,
Bells of joy! On morning's wing

鳴りひびけ　揺れうごけ
歓喜の鐘よ！　朝(あした)の翼にのりて

Send the song of praise abroad!
With a sound of broken chains
Tell the nations that He reigns,
Who alone is Lord and God!

ほめ歌を海のかなたに送れ！
断ち切られたる鎖の
響きとともにひとりの神
しろしめすと全人類に告げよ！

Whittier の風景にはその中に人物が描かれている。通常彼等の活動は風景に意味をそえるように配慮されている。彼は自然を自然として歌うよりも人生を表わすために用いたと云へよう。彼は自然の美しさを楽しんだが，それと同時に自然の中に，心をいやす力を認め，自然の中に人生のわずらわしさからの避難所をみつけた。

POEMS OF NATURE

THE TRAILING ARBUTUS

I wandered lonely where the pine-trees made
Against the bitter East their barricade,
And, guided by its sweet
Perfume, I found, within a narrow dell,
The trailing spring flower tinted like a shell
Amid dry leaves and mosses at my feet.

From under dead boughs, for whose loss the pines
Moaned ceaseless overhead, the blossoming vines
Lifted their glad surprise,
While yet the bluebird smoothed in leafless trees
His feathers ruffled by the chill sea-breeze,
And snow-drifts lingered under April skies.

As, pausing, o'er the lonely flower I bent,
I thought of lives thus lowly, clogged and pent,
Which yet find room,
Through care and cumber, coldness and decay,
To lend a sweetness to the ungenial day,
And make the sad earth happier for their bloom.

自　然　詩

いわなし

私は松の林が厳しい東風に対して，防さいを築いている辺りを独り淋しくさまよった。そして
芳ばしい香りに誘われて行ってみると
狭い小谷の中で，私の足もとの乾いた木の葉や
苔の間に，貝殻のような色をおびた
匍匐する春の花をみつけた。

枯れ枝—それを失った松は頭上で絶え間なく呻き悲しんでいた—の下から花をつけた蔓が誇らしげに人目を驚かす花をもたげていた。
一方では未だ葉のない梢の間で青い羽根の鳴き鳥が冷たい海風に乱れた羽毛のしわをのばしていた，吹きよせた雪は四月の空のもとに消えもせずにいるのに。

足を止めて淋しい花の上に身をよせながら
私はこんな風に，ふさがれ閉じこめられた卑しい身ながら，尚心配と束縛と寒さと衰微を通して，陰気な空に芳香を放ち，その花によって悲しげな大地を楽しくさせる程のゆとりを持っている人々のことを思った。

THE WIND OF MARCH

Up from the sea the wild north wind is blowing
Under the sky's gray arch;
Smiling, I watch the shaken elm-boughs, knowing
It is the wind of March.

Between the passing and the coming season,
This stormy interlude
Gives to our winter-wearied hearts a reason
For trustful gratitude.

Welcome to waiting ears its harsh fore-warning
Of light and warmth to come,
The longed-for joy of Nature's Easter morning,
The earth arisen in bloom!

In the loud tumult winter's strength is breaking;
I listen to the sound,
As to a voice of resurrection, waking
To life the dead, cold ground.

Between these gusts, to the soft lapse I hearken
Of rivulets on their way;
I see these tossed and naked tree-tops darken
With the fresh leaves of May.

This roar of storm, this sky so gray and lowering
Invite the airs of Spring
A warmer sunshine over fields of flowering,
The bluebird's song and wing.

Closely behind, the Gulf's warm breezes follow
This northern hurricane,

三　月　の　風

海から荒々しい北風が吹いてくる
空の灰色のアーチの下に。
微笑みながら私は揺いでいる
ニレの枝をぢっと見つめて，
三月の風だと知る。

過ぎゆく季節と近づく季節の間で
此の荒々しい風の間奏曲は
冬のうんざりした人々の心に
信頼する感謝を表わす理由を与へる。

光まばゆき温き春の到来を予告する風は荒く
とも，待ちわびる人々の耳には有難いものだ。
「自然」の復活祭の朝の待ち望んだ喜び，
大地は花の中によみがえる！

大きな騒がしさの中に冬の力は弱まりゆく。
私はその響にぢっと耳をすます
丁度生気のない冷い土をよみがえらす
復活の声をきくように。

此等の疾風の間に私は流れゆく
小川の静かな流れに耳をかたむける。
私は風にもまれた裸の木の梢が
五月ともなれば瑞々しい若葉
で黒ずむのを見る。

此の嵐の叫び，此の灰色の険悪な空は
春ののどかなそよ風，花盛りの野原一面に輝く
温い日の光り，囀りとびかう青い鳴き鳥の
おとづれをまねく。

ぴったり後から湾の温い微風が
此の北の大暴風についてくる，
そしてそれに運ばれて

And, borne thereon, the bobolink and swallow
Shall visit us again.

米食い鳥やつばめが
再び我々をおとづれるであろう。

And, in green wood-paths, in the kine-fed pasture
And by the whispering rills,
Shall flowers repeat the lesson[8] of the Master,
Taught on his Syrian hills.

みどりの森の小径に
牛が草をはむ牧場に
ささやく小川のほとりに,
花はかのシリヤの山で説かれた
主のみ教へをくりかへすであろう。

Blow, then, wild wind! thy roar shall end in singing,
Thy chill in blossoming;
Come, like Bethesda's[9] troubling angel, bringing
The healing of the Spring.

さらば吹け，荒き風よ！おまへのうなりは
歌声となり，おまへのひやりとする冷たさは
やがて花をほころばすであろう。さあ,
ベセスダのいそしみはげむ天使のように,
和らげ医す春をもたらせ。

REMINISCENT POEMS

追 憶 詩

MY PLAYMATE

私の遊び友達

The pines were dark on Ramoth hill,
Their song was soft and low;
The blossoms in the sweet May wind
Were falling like the snow.

レイモスの山の松は黒く茂り
松風は低くやさしい響を伝えた。
香ばしい五月の風に吹かれて
花は雪のごとく散っていった。

The blossoms drifted at our feet,
The orchard birds sang clear;
The sweetest and the saddest day
It seemed of all the year.

散りしく花は私達の足もとに漂い
果樹園の小鳥達は朗らかに歌った。
それは一年中で一番美はしくまた
一番悲しい日に思はれた。

For, more to me than birds or flowers,
My playmate left her home,
And took with her the laughing spring,
The music and the bloom.

なぜなら鳥よりも花よりも私に大切な
遊び友達が，家をはなれたから,
笑う春も音楽も花も持って行って仕舞ったから。

She kissed the lips of kith and kin,
She laid her hand in mine;
What more could ask the bashful boy
Who fed her father's kine?

彼女は親戚朋友の唇に接吻した,
彼女は私の手を握りしめた，だが
はづかしがりやの少年がどうしてそれ以上何を
求められよう，彼女の父の牛飼の身として。

She left us in the bloom of May;
The constant years told o'er

彼女は五月の花の中に我々を残した,
年毎に変ることなく四季を数える歳月は

Their seasons with as sweet May morns,
  But she came back no more.

今年もさわやかな五月の朝をもたらした，
だが彼女は最早もどってこなかった。

I walk, with noiseless feet, the round
  Of uneventful years;
Still o'er and o'er I sow the spring
  And reap the autumn ears.

私は足音をしのばせながら，
年々単調な生活を送っている。
何度も何度も同じように，春に
播いて秋に穂を刈り入れる。

She lives where all the golden year
  Her summer roses blow;
The dusky children of the sun
  Before her come and go.

彼女は黄金のようなすばらしい一年中
彼女の夏のばらが咲く所に住んでいる
浅黒い太陽の子供達が
彼女の前を行き来している。

There haply with her jewelled hands
  She smooths her silken gown,—
No more the homespun lap wherein
  I shook the walnuts down.

そこで宝石を飾った手で彼女は
絹の長上衣をなでているだろう。
私が胡桃を投げこんだ手織りの
スカートのひざを最早つけていまい。

The wild grapes wait us by the brook,
  The brown nuts on the hill,
And still the May-day flowers make sweet
  Tho woods of Follymill.

小川のほとりの野ぶどうも
丘の上の褐色の胡桃も
私共を待っている，また今も五月祭の花は
フォリミルの森に匂っている。

The lilies blossom in the pond,
  The bird builds in the tree,
The dark pines sing on Ramoth hill
  The slow song of the sea.

睡蓮は池の中に花咲き
鳥は樹間に巣をつくり
レイモスの山の黒い松は海の
歌をゆるやかに歌っている。

I wonder if she thinks of them,
  And how the old time seems,—
If ever the pines of Ramoth wood
  Are sounding in her dreams.

彼女はそれらを心に浮べることがあろうか。
又昔のことがどんな風に思へるだろうか。
いつかレイモスの森の松風が
彼女の夢に響くことがあろうか。

I see her face, I hear her voice;
  Does she remember mine?
And what to her is now the boy
  Who fed her father's kine?

私には彼女の顔が見え，彼女の声が聞える，
彼女は私の顔や声を覚えているだろうか，
又彼女にとってそんな私が何であろう
彼女の父の牛飼だった少年が。

What cares she that the orioles build
  For other eyes than ours,—
That other hands with nuts are filled,
  And other laps with flowers?

私達の為めでなく他人の眼を慰めるために
高麗鶯が巣をつくろうと彼女は何を気にしよう。
他人の手が胡桃でみたされようと
又他人の膝が花でみたされようと！

O playmate in the golden time!
  Our mossy seat is green,
Its fringing violets blossom yet,
  The old trees o'er it lean.

The winds so sweet with birch and fern
  A sweeter memory blow;
And there in spring the veeries sing
  A song of long ago,

And still the pines of Ramoth wood
  Are moaning like sea,—
The moaning of the sea of change
  Between myself and thee!

いと楽しき時代の遊び友達よ！
共にすわった滑かな苔は緑色をおび
その縁には今も菫が咲き乱れ，昔の樹は
それをおおうかのように茂っている。

風は樺やしだの香りをつたえ
更に香ばしい思い出を吹き送る。
そこで春になればつぐみが
遠い昔の歌を歌う。

そしてレイモスの森の松は
今も海のようにむせび泣いている。
変遷の海のむせび泣き，
私とお前の間の変遷の海のむせび泣き！

IN SCHOOL-DAYS

Still sits the school-house by the road
  A ragged beggar sleeping;
Around it still the sumachs grow,
And blackberry-vines are creeping.

Within, the master's desk is seen,
  Deep scarred by raps official;
The warping floor, the battered seats,
  The jack-knife's carved initial;

The charcoal frescos on its wall;
  Its door's worn sill, betraying
The feet that, creeping slow to school,
  Went storming out to playing!

Long years ago a winter sun
  Shone over it at setting;
Lit up its western window-panes,
  And low eaves' icy fretting.

It touched the tangled golden curls,
  And brown eyes full of grieving,
Of one who still her steps delayed
  When all the school were leaving.

学　校　時　代

今もなほ校舎は路傍にある，
みすぼらしい乞食が眠っているように，
その周囲には今でもはぜが生い茂り
黒いちごの蔓がはい拡がっている。

内部には教師の机が見える，教師の厳しい鞭撻
がその上に深い傷痕を印している。
ゆがんだ床板，こわれた腰掛，
海軍ナイフで彫った頭文字も見える。

その壁には木炭でフレスコ画が描かれている，
その磨滅した戸口の敷居は，教室へはそっと入
ってきた足が運動場へは競って走って行ったこ
とを示している。

ずっと昔冬の夕日が
くれなずむ校舎の上に輝き，その西向の
窓がガラスと低い軒端に垂れた氷の
格子細工を明るく照した。

夕日は少女のもつれた金髪の捲毛と
悲しみに沈んだ褐色の眼を赤くそめた。
彼女は去りかねて歩みも捗らなかった，
全校生徒が帰りゆく中に。

For near her stood the little boy
  Her childish favor singled:
His cap pulled low upon a face
  Where pride and shame were mingled.

Pushing with restless feet the snow
  To right and left, he lingered;—
As restlessly her tiny hands
  The blue-checked apron fingered.

He saw her lift her eyes; he felt
  The soft hand's light caressing,
And heard the tremble of her voice,
  As if a fault confessing.

"I'm sorry that I spelt the word:
  I hate to go above you,
Because,"— the brown eyes lower fell,
"Because, you see, I love you!"

Still memory to a gray-haired man
  That sweet child-face is showing
Dear girl! the grasses on her grave
  Have forty years been growing!

He lives to learn, in life's hard school,
  How few who pass above him
Lament their triumph and his loss,
  Like her,—because they love him.

その訳は彼女がいぢらしくも子供心に択んだ
一人の男の子が彼女の近くにいたから。
彼は帽子を目深にかぶり，その表情には
誇りと恥辱の色が表われていた。

落着かぬ足で右に左に雪をけりながら
彼は去りかねていた—彼女も同じように
落つかず小さな手で青い縞の
エプロンをなぶっていた。

少年は少女が眼を上げるのを見た，
柔な手が軽く手にふれるのを感じた，
そして恰も過失を告白するかのように
彼女の声がふるえるのが聞えた。

「あの言葉を私がうまく綴ってすみませんでした，
私はあなたの上位になるのがいやなんです，
それは」—褐色の眼は一層いぢらしくうつむいた，
「それは—あなたが好きだからです！」

白がまじりの老人に今なお思い出は
あのやさしい少女の顔を見せている。
いとしい少女よ！その児の墓碑の上には
四十年この方草がむしている。

彼はながらへて人生のきびしい学校で，
彼の上へ上へと追越してゆく人々の中で，
彼女のように彼を愛するがゆえに，
彼等の勝利と彼の損失とを悲しむ者の如何に少いかを知る。

OCCASIONAL POEMS

The Light That Is Felt

A tender child of summers three,
  seeking her little bed at night,
Paused on the dark stair. timidly.
  "Oh mother! take my hand," said she,
"And then the dark will all be light."

偶 作 詩

感得される光明

三才の幼な児が夜間にその小さなベッドに行こうとして，おじおじしながら暗い階段で立ちどまった。「ママ私の手をとって頂戴」と其の児は云った，「そうすればくらい夜も明るくなるでしょう。」

We older children grope our way
From dark behind to dark before;
And only when our hands we lay,
Dear Lord, in thine, the night is day,
And there is darkness never more.

私達は長ずるにつれて後の暗い所から，前方の明るい所へと，手探りで進む，そしてただ神様の御手におすがりする時始めて夜は真昼となり暗黒は消えてしまいます。

GRAND WISHES

Two little girls loose from school
Queried what each would be;
One said, "I'd be a queen and rule."
And one, "The world I'd see."

The years went on. Again they met
And queied what had deen:
"A poor man's wife am I, and yet"
Said one, "I am a queen.

My realm a happy household is,
My king a husband true;
I rule by loving services;
How has it been with you?"

She answered: "Still the great world lies
Beyond me as it laid;
O'er love's and duty's boundaries
My feet have never strayed.

Faint murmurs of the wide world come
Unheeded to my ear!
My widowed mother's sick bedroom
Sufficeth for my sphere."

They clasped each other's hands; with tears
Of solemn joy they cried;
"God gave the wish of our young years,
And we are satisfied."

大いなる望

学校帰りの二人の女の子が
おたがいに将来の望みを尋ね合ったとき，
一人は云った「私は女王となって治めよう」
もう一人は云った「私は広く世界をみよう」と。

年をへてまたふたりは会って
互の身分をたづねあったとき
一人は云った「私は実に女王となった，
貧しい人の妻ではあるが。

楽しい家族は私の王国で，
誠実な夫は私の王です。
愛の奉仕で私は治めます，
あなたの場合はどうなりましたか。」

彼女は答へた「広き世界は今もなほ
昔に変らず遠いかなたにあります。
だが愛と義務との境をこえて
私の足は出たことはありません。

広き世界の音信は微に耳にひびけど，
私は耳をかたむけもしません。
私の領域としては寡婦となれる
母の病室で十分です」と。

二人はたがいに手をとりあって
嬉し涙にむせびつつ厳に叫んだ，
「神様は私達の若い時の願をきき給うた，
私達の望みはみたされた」と。

RELIGIOUS POEMS

WORSHIP

O brother man! fold to thy heart thy brother;
Where pity dwells, the peace of God is there;

宗教詩

礼拝

おお兄弟よ！
汝の兄弟を温く心にいだけ，
あわれみの在るところに神の平和あり，

To worship rightly is to love each other,
Each smile a hymn, each kindly deed a prayer.

正しき礼拝とは互に愛することなり。
かくて各々の微笑は賛歌となり，
各々の優しき行為は祈りとならん。

Follow with reverent steps the great example
Of Him whose holy work was "doing good;"
So shall the wide earth seem our Father's temple,
Each loving life a psalm of gratitude.

敬虔なる歩みもて
主の大いなる御範(みのり)に従へ，
主の聖き仕事は
よきわざを為す事なれば。
かくて広き大地も天帝の宮と見え，
各々の慈愛にみちたる生活は
感謝の聖歌とならん。

Then shall all shackles fall; the stormy clangor
Of wild war music o'er the earth shall cease;
Love shall tread out the baleful fire of anger,
And in its ashes plant the tree of peace!

その時すべての枷(かせ)ははずされん。
凄じき剣戟の響きは
地上より消えうせん。
愛をして災の怒の劫火を
踏み消さしめよ。
而してその焼跡に
平和の樹を植えしめよ！

Whittier は此の詩に於て狭い宗派心を超越してクエーカーの使命を力強く主張している。

OUR MASTER

我等の主

Immortal Love, forever full,
Forever flowing free,
Forever shared, forever whole,
A never-ebbing sea!

とこしえにみちみてる不滅の愛よ，
とこしえに流れてとらわるることなく
とこしえに分つもとこしえにみち足る
ああとこしえに減ずることなき海よ

Blow, winds of God, awake and blow
The mists of earth away!
Shine out, O Light Divine, and show
How wide and far we stray!

吹け，神風よ，めざめよ，而して大地
の霧を吹き払へ，きらめき出でよ
聖なる光而して我等がさまようこと
の如何に広く遠きかを示せ

Hush every lip, close every book,
The strife of tongues forbear;
Why forward reach, or backward look,
For love that clasps like air?

凡ての口をつぐめ，凡ての本を閉じよ，
口舌(くぜつ)の争ひをやめよ，何とて手を伸ばし
或はふり返りて空気の如く我等を
とりまく愛を求めんとはする

We may not climb the heavenly steeps
To bring the Lord Christ down:(10)
In vain we search the lowest deeps,
For Him no depths can drown.

我等は主キリストを引き下ろさんとて，そそり
立つ天の峻嶮に上るを要せずいと深きみなそこ
尋ぬとも空しかるべし，そはいと深き淵も主を
溺すことを得ざればなり

But warm, sweet, tender, even yet	されど心暖く貴く優しき主は
A present help is He;	まして悩める時の近き助けなり
And faith has still its Olivet,[11]	信仰は尚カンラン山に生く
And love its Galilee.[12]	愛はガリラヤ湖畔に生きつづく
The healing of His seamless dress[13]	主の縫めなき衣のくすしき力は
Is by our beds of pain;	病の床につきてはなれず
We touch Him in life's throng and press,	うき世のざわめく巷にありて
And we are whole again.	御袖にふれなば病もいえん
Through Him the first fond prayers are said	おさな児のくちびるもるる
	初めのいのりも
Our lips of childhood frame,	いまわのきわの
The last low whispers of our dead	かぼそきいのりも
Are burdened with His name.	ともに主の御名
Our Lord and Master of us all!	我等をしろしめす主よ御神よ！
Whate'er our name or sign,	たとい我等の名前や署名はいかなるとも
We own Thy sway, we hear Thy call,	主は我等をすべたまひ，来よとの御召しを我等
We test our lives by Thine.	はきく，我等御範かしこみみあと辿らん
Apart from Thee all gain is loss,	主より離るれば凡ての利得は損失となり
All labor vainly done;	すべての労働はなすともむなし
The solemn shadow of Thy Cross	主の十字架の厳なる影は
Is better than the sun.	日の光りにはるかにまさる
Alone, O Love ineffable!	おお言葉につくせぬ聖き愛よ！
Thy saving name is given;	ひとり主の救ひの御名はつげられたり
To turn aside from Thee is hell,	主より離るることは地獄なり
To walk with Thee is heaven!	主と共に歩むことは天国なり

第一連に於てすべてを与へてしかも減ずることなき神の恒久不変性を表わしている。

第二連に於て詩人は神に祈り，我々の心の目標をくらますような 俗界の霧を吹き払ひたまえと祈願する。

第四連に於て神の遍在を説き，キリストは書籍の中に彼を求めんとする人々には，空気のごとく手に取ることが出来ない。このように考えてWhittierは，「我々は天からキリストを引き下ろすことは出来ない，又深き海の底にキリストを見出そうと望むことも出来ない」と云う。

全詩は，権威や形式的宗教を信頼するよりも，神との霊的交通を信ずるWhittierの信念を明らかにしている。

THE ETERNAL GOODNESS	久遠の愛
O friends! with whom my feet have trod	おお友よ！　共に静かな会堂の翼廊を

The quiet aisles of prayer,
Glad witness to your zeal for God
And love of man bear.

たどりし友よ！　私はあなた方の
神に対する愛と人間愛とを
快く証明する。

But still my human hands are weak
To hold your iron creeds:
Against the words ye bid me speak
My heart within me pleads.

けれども私の手はか弱くしてあなた方の
鉄の信条を持つことはできない。
あなた方が私に述べよと告げる信条を
私は快くうべなうことはできない。

Who fathoms the Eternal Thought?
Who talks of scheme and plan?
The Lord is God! He needeth not
The poor device of man.

誰が久遠の神慮を計ることが出来ようか。
誰が神のもくろみを知ることが出来ようか。
エホバは神なれば人の子の
つたなき工夫などを要せぬ。

I walk with bare, hushed feet the ground
Ye tread with boldness shod;
I dare not fix with mete and bound
The love and power of God.

私が素足で静かに歩む地面を
あなた方は靴のままで大胆に踏みつける。
私は敢て区画を定められない
神の愛と力とのけじめを。

Ye praise His justice; even such
His pitying love I deem:
Ye seek a king; I fain would touch
The robe that hath no seam.(14)

あなた方は神の理非の裁きを賛える。
それをしも私は神の恵みと思う。
あなた方は王者をもとめる，私は
あの縫目のない衣にさわりたいと思う。

Ye see the curse which overbroods
A world of pain and loss;
I hear our Lord's beatitudes
And prayer upon the Cross.

あなた方は苦痛と死の世界を
おおう呪ひをみる。
私は我等の主イエスの祝福と
十字架上の祈りをきく。

I bow my forehead to the dust,
I veil mine eyes for shame,
And urge, in trembling self-distrust,
A prayer without a claim.

私は大地にぬかづく，
私は恥かしさの余り目をおおう，
そして震へながら自信はなけれど
要求なき祈りを強調する。

I see the wrong that round me lies,
I feel the guilt within;
I hear, with groan and travail-cries,
The world confess its sin.

私は身のまわりに在る不正をみる，
私は心の中に罪を感ずる，
私は呻き声や陣痛の叫びをあげて
世の人々が罪を告白するのをきく。

Yet, in the maddening maze of things,
And tossed by storm and flood,
To one fixed trust my spirit clings;
I know that God is good!

だが心を狂はす複雑な事態に於ても
また浮世の嵐や洪水にもまれても，
私は神に確固たる信頼をよせる。
私は神は善なることを知る。

I long for household voices gone,	私は逝ける家族の声を熱望する,
For vanished smiles I long,	消えうせた微笑を切望する,
But God hath led my dear ones on,	だが神は私の親しい人達を導き給うた。
And He can do no wrong.	神は不法をおこなうことありえない。
I know not what the future hath	未来にどのような驚くべき事が
Of marvel or surprise,	あるかを私は知らない。
Assured alone that life and death	私は生きるも死ぬるも神の恵みが
His mercy underlies.	その底にあることを確信するのみだ。
And if my heart and flesh are weak	そしてたとい身も心も弱い私は未だ
To bear an untried pain,	試されたことのない苦しみに耐えずとも,
The bruised reed[15] He will not break,	神は痛める葦を折りたもう事なく
But strengthen and sustain.	強め支へたもうであろう。
And so beside the Silent Sea	そこで静かな海のそばで
I wait the muffled oar;	私は布につつまれた櫂を待つ。
No harm from Him can come to me	主が私を痛めそこのうことはあり得ない,
On ocean or on shore.	よし海上なりと陸上なりと。
I know not where His islands lift	主の島々のしゅろの葉が空高く聳える
Their fronded palms in air;	ところを私はしらない, 私は主の愛と
I only know I cannot drift	加護の及ばぬ所へただようことは
Beyond His love and care.	ありえないことを知るのみだ。

「久遠の愛」はWhittierの最もすぐれた宗教詩の一つである。この詩は, カルヴイニズムの怒りの神と異り, 神は人間の救済に深き関心を寄せていると云う普遍的な信念を映し出している。本詩を通して, 神の愛が世俗的悪や罪と対比させられている。

Whittierは神の御心を測り知ることが出来ないことを認めるが, 神の愛に区劃を定めようとする人々を非難する。

最後の連にいたってWhittierの神に対する信頼は比喩的描写によって具体的に有効に明らかに示されている。静かな死の海のほとりで船出の用意をする。未知の国を通して安息としゅろの茂るパラダイスに向う魂の描写と思われる。

PASTORAL POEM　　田園詩

「雪ごもり」"Snow-Bound" は南北戦争後数ケ月して書かれたもので彼の生涯に於て最も親しかった二人の女性—彼の母と妹への追憶詩であり, 彼の数多くの詩の中の代表作である。

彼は此の詩の中でニュー・イングランドの農夫の冬の生活, 炉辺の楽しいつどい, 亡き人々に対する追憶を素朴に美しい表現で歌っている。

SNOW-BOUND	雪ごもり
The sun that brief December day	日脚短き師走のひと日

Rose cheerless over hills of gray,
And, darkly circled, gave at noon
A sadder light than waning moon.
Slow tracing down the thickening sky
Its mute and ominous prophecy,
A portent seeming less than threat,
It sank from sight before it set.
A chill no coat, however stout,
Of homespun stuff could quite shut out,
A hard, dull bitterness of cold,
That checked, mid-vein, the circling race
Of life-blood in the sharpened face,
The coming of the snow-storm told.
The wind blew east; we heard the roar
Of ocean on his wintry shore,
And felt the strong pulse throbbing there
Beat with low rhythm our inland air.

太陽は灰色の丘にわびしく上り，
暗く空をめぐり真昼時と云うに
かけてゆく月よりも悲しい光をなげた。
曇る空を下へ無言不吉の暴風雨の予言，
威嚇とまではゆかぬ前兆
をゆっくり描き，真昼時その姿は
視界から消えた。手製ラシャの外套は
どれ程丈夫であろうとも
防ぎきれぬ冷たさ，とがった顔に
流れる血の循環を血管中に止めてしまう程の
冷酷にして疼くようなきびしい寒気が，吹雪の
到来をつげた。風は東から吹き
我々は荒涼とした
岸辺に大洋のうなりを聞いた。
そこに鼓動する強い脈搏が
低いリズムをもって内陸の
空気を打つのを感じた。

Unwarmed by any sunset light
The gray day darkened into night,
A night made hoary with the swarm
And whirl-dance of the blinding storm,
As zigzag, wavering to and fro,
Crossed and recrossed the wingëd snow:
And ere the early bedtime came
The white drift piled the window-frame,
And through the glass the clothes-line posts
Looked in like tall and sheeted ghosts.

日暮れ時の日の光によって温められもせず
灰色の日はくれて夜となった。目もくらむ
許りに群りきたって舞い舞う吹雪のために
夜は白まり，翼のある雪片は此方彼方へ
稲妻形にゆれ動き，空を舞いつ
もどりつした。まだ早寝の人の就床時は
来ぬのに，白い吹きだまりは，窓枠
につもり，ガラス越しに干物架の
柱は，背の高い白装束の幽霊
の如く中をのぞきこんだ。

And, when the second morning shone,
We looked upon a world unknown,
On nothing we could call our own.
Around the glistening wonder bent
The blue walls of the firmament,
No cloud above, no earth below,—
A universe of sky and snow!
The old familiar sights of ours
Took marvellous shapes; strange domes and towers
Rose up where sty or corn-crib stood.

次の朝となり太陽が輝くと
眼に入るものは未知の世界，
我々のものと呼ぶものは何一つない。
天空の青い壁は，きらめく驚異の
世界のまわりに身をかがめ，
上に雲なく下に大地なく，
空と雪との宇宙あるのみ！
我々の懐しい見なれた光景は
驚くべき形をあらわした。
奇妙な円屋根や塔が豚小屋
や秣槽(かひばおけ)があったところに聳った。

As night drew on, and, from the crest
Of wooded knolls that ridged the west,
The sun, a snow-blown traveller, sank
From sight beneath the smothering bank,
We piled, with care, our nightly stack
Of wood against the chimney-back,—
The oaken log, green, huge, and thick,
And on its top the stout back-stick;
The knotty forestick laid apart,
And filled between with curious art
The ragged brush; then, hovering near,
We watched the first red blaze appear,
I heard the sharp crackle, caught the gleam
On whitewashed wall and sagging beam,
Until the old, rude-furnished room,
Burst, flower-like, into rosy bloom;

夜が近づき西の方に隆起した
樹のしげった丘の頂から，
雪に吹かれた旅人のような太陽が
窒息しそうな堤の下に姿をけした。
我々は夜の薪を煖炉の奥に注意ぶかく
山と積んだ。一緑の大きな太い樫の丸太と
其の上にしっかりした奥焚きの枯枝，節だらけ
の前焚きの枯枝を離して横えた。
その間に珍らしい術で，不揃の粗朶を
つめ込んだ。それから近くに佇
んで，我々は最初の赤い炎の
現れるのを眺め，鋭くパチパチ
火のはねる音を聞き，白壁や
弛みかけた梁に映る光の閃きを
見た時，粗末な家具，古ぼけた部屋
が一変して花のようにバラ色に花を開いた。

Ah, brother! only I and thou
Are left of all that circle now,—
The dear home faces whereupon
That fitful firelight paled and shone.
Henceforward, listen as we will,
The voices of that hearth are still;
Look where we may, the wide earth o'er,
Those lighted faces smile no more.
We tread the paths their feet have worn,
  We sit beneath their orchard trees,
  We hear, like them, the hum of bees
And rustle of the bladed corn;
We turn the pages that they read,
  Their written words we linger o'er,
But in the sun they cast no shade,
No voice is heard,no sign is made,
  No step is on the conscious floor!

ああ弟よ！　御身と私とのみ
このまどいから残された。
断続的な炉火がほの暗く照した懐しい家の顔，
今後如何に耳を傾けようとも
その炉べの声は黙し，世界中どこを眺めよう
とも，輝いた顔は最早ほほえみはしない。
我々は彼等が歩んだ径をたどり
彼等の果樹園の木の下に憩う。
彼等のように，蜜蜂のうなり声，葉片のある
トーモロコシの葉づれをきく。
我々は彼等が読んだ本の頁をめくり，
彼等が書いた文字をよむ。
しかし彼等は日の光の中に
影をなげもせず，
声もきこえず，合図もない。
床をふみゆく足音を
聞くよしもない。

炉の暖気によって輝いたなつかしい顔は，もはやほほえみはしない。けれども詩人は愛と信仰とによって，別れた人にもいつかは会える，と確信する。

Yet Love will dream, and Faith will trust,
(Since He who knows our need is just,)
That somehow, somewhere, meet we must.

けれども愛は夢み信仰は信ずる，
(我々の困窮を知り給う主は正しければ)
どうにかして，どこかで我々はきっと会えるに
ちがいないと。

父が更に語る所によれば，彼は馬を進めて Memphremagog 湖の樹の茂った岸辺に行き，狩猟人の小屋やインディアンのキャンプの中で大鹿のそばに坐り，ひき割りトーモロコシのスープを啜ったり，聖フランソワの北米産ツガの下で，牧歌的な気楽な生活をしたり，Boar 岬の沖で魚釣りをしたり，岩の多い Isles of Shoals のあたりで流木を燃やして，タラを焼き，浜辺で蛤や野菜入りのスープを作ったりした。

母は糸車をまわしたり，新しく編んだ靴下のかかとを縫ったりしながら，インディアンが真夜中に Cocheco town を襲ったりした物語をした。又母の大叔父は，彼のは無残にもぎ取られた頭皮のあとを80才まで保っていた，などの話をした。

母はまた凡てのクエーカー教徒の間で愛読されている Sewell の古い一巻から，年老いて風変りな海の聖者と云われる Chalkey に関する物語を語った。Chalkey が航海中無気味な無風状態に入り船内には，大樽に入れた水も，樽に入れたパンも欠乏し，残酷な空腹の眼が食料を求めて船長の肥満した身体を追ひ，生かすか殺すかのくぢを引こうと小声でささやいた時，『天が食料を与へるのを差控えるならば，私が犠牲になろう』と申し出た。その折り此の善人を食い殺される運命から守るかのように，にわかに水上に漣立って，イルカの一群が視界に入った。『取って食へ』と彼はいった，『満足する迄食へ，此等の魚は私に代らしめんとして，アブラハムの子を助けるために，叢に角をからました牡羊を与へ賜へる主が与へられたものだ』と語った。

私の叔父は無学文盲なれども野原や小川の知識豊かで，雲のすがたを予言と判じた。彼自身自然の心に近く，鳥獣の声も彼にははっきりした意味を持った。

He told how teal and loon he shot,
And how the eagle's eggs he got,
The feats on pond and river done,
The prodigies of rod and gun;
Till, warming with the tales he told,
Forgotten was the outside cold,
The bitter wind unheeded blew,
From ripening corn the pigeons flew,
The partridge drummed i' the wood, the mink
Went fishing down the river-brink.
In fields with bean or clover gay,
The woodchuck, like a hermit gray,
Peered from the doorway of his cell;
The muskrat plied the mason's trade,
And tier by tier his mud-walls laid;
And from the shagbark overhead
The grizzled squirrel dropped his shell.

彼は子鴨やアビ（北半球に住む海鳥）を撃ったこと，鷲の卵を取ったこと，池や川の上で演じためざましい妙技，釣り竿や鉄砲での驚嘆すべき行為を語った。
やがて自分が語った物語りに熱中して外界の寒さも忘れられてしまった。
厳しい風が吹くとも気にもとめず，
熟れたトーモロコシから野鳩が飛び立ち，
シャコが森で太鼓をたたき，ミンクは
川堤を下って魚をとりに行った。
豆，クローバの咲きみだれた野には
灰色の隠遁者のような
山ねずみが穴の入口からのぞき，
ジャコウネズミは石工の仕事に精をだし
一段一段と泥かべをつくった，
そして頭上のヒッコリーの枝から
灰色のリスは堅果の殻を落した。

Next, the dear aunt whose smile of cheer
And voice in dreams I see and hear,—
The sweetest woman ever Fate
Perverse denied a household mate,

次に愛する叔母，その快活なほほえみ，
夢みる如き声は，今も目に見え耳に聞える。
片意地な運命が配偶を拒んだ
最も気立てやさしい女性である。

Who, lonely, homeless, not the less
Found peace in love's unselfishness,
And welcome wheresoe'er she went,
A calm and gracious element,
Whose presence seemed the sweet income
And womanly atmosphere of home,—

淋しく家なき女性なるも，それにも拘らず
没我的愛に心の平和を見出し，
行く所ではどこでも喜ばれ，
平静にして恵み深い本来の性(さが)，
彼女の存在は家に優しさを増し，
女性の雰囲気をかもし出した。

There, too, our elder sister plied
Her evening task the stand beside;
A full, rich nature, free to trust,
Truthful and almost sternly just,
Impulsive, earnest, prompt to act,
And make her generous thought a fact,
Keeping with many a light disguise
The secret of self-sacrifice.

そこでまた姉は小卓のそばで
夜の仕事に精を出した。
みち足りた豊かな性質，信じ易く
誠実にして殆んど厳しい程に正直，
衝動的，真面目で，すぐさま行動し，
寛容な思想を事実となすに吝かならず，
うわべはさりげなく装いて
自己犠牲の秘密を守った。

次は大きな，優しい，物を聞きたそうな眼の持主の妹，彼女は一家の中でWhittierの最も愛していた人，今はパラダイスの聖い平和に浸って居る。

Oh, looking from some heavenly hill,
  Or from the shade of saintly palms,
  Or silver reach of river calms,
Do those large eyes behold me still?
With me one little year ago:—
The chill weight of the winter snow
  For months upon her grave has lain;
And now, when summer south-winds blow
  And brier and harebell bloom again,
I tread the pleasant paths we trod,
I see the violet-sprinkled sod
Whereon she leaned, too frail and weak
The hillside flowers she loved to seek,
Yet following me where'er I went
With dark eyes full of love's content.
The birds are glad; the brier-rose fills
The air with sweetness; all the hills
Stretch green to June's unclouded sky;
But still I wait with ear and eye
For something gone which should be nigh,
A loss in all familiar things,
In flower that blooms, and bird that sings

どこか天の小山から，或は
聖いしゅろの蔭から，或は
静かな銀色の川の流域から眺めながら，
御身は例の大きな目で今もなほ私を見給うか？
私に於てはつい一年前:—
冬の雪の冷い重みが
数ケ月も彼女の墓の上に積った，
そして今，夏の南風が吹き
野ばらや野生ヒヤシンスが再び咲く時，
私は私達が踏み辿った楽しい小径をふむ。
私は彼女が身をよせた堇の点在せる芝生を見る
彼女はとても虚弱なので好きな丘の辺の
花を探すことも出来ない。だが愛情の満足に
充ちあふれた黒いまなざしで，私の行く
ところに私のあとを追った。
鳥達は楽しげだ，いぬばらの芳香で
大気はむせかえる計り，凡ての小山は
六月の雲なき空に対して緑を拡げている，
然しやはり私は耳と目を以て近くに在るべき
物の今は亡き姿をもとめる。
凡ての見なれたもの中に，
咲きほこる花の中に，歌う鳥の中に，

And yet, dear heart! remembering thee,
  Am I not richer than of old?
Safe in thy immortality,
  What change can reach the wealth I hold?
  What change can mar the pearl and gold
Thy love hath left in trust with me?
And while in life's late afternoon,
  Where cool and long the shadows grow,
I walk to meet the night that soon
  Shall shape and shadow overflow,
I cannot feel that thou art far,
Since near at need the angels are;
And when then the sunset gates unbar,
  Shall I not see thee waiting stand,
And, white against the evening star,
  The welcome of thy beckoning hand?

今は亡きものの姿をもとめる。然し懐しき人よ！
御身を思い起すとき，
私は昔より心が豊でないだろうか？
御身の永遠性を信じて心安きが故に。
如何なる変化が我が富に及びうるだろうか？
如何なる変化が
御身が私に委ねた真珠や黄金
を害いうるだろうか？
そして影が冷く長くなる人生のたそがれ時，
私がやがて形と影を浸す夜に会いに
ゆく時，私は御身が遠きにありと
思うことは出来ぬ，天使達は
まさかの時近くに居るものなれば。
そして日没の門がひらかれる時，
私を待ちながら白の装いで夕の明星に
よりそうて立ち，手をあげて私をさし招き
喜び迎える御身の姿を私は見ないだろうか？

懐しい家族の紹介がすむと次は同居して居る地方の学校の先生の紹介に移る。樺の笞と定規とを元気にふるう先生は，いつものようにお気に入りの炉辺に席を占めた。彼はふたまた手袋を猫にかぶせていぢめたり，クロスピンをやったり，興に乗じて歌を歌ったりした。彼は荒れ果てた北部の山間の生れ，彼の父は，そんな荒地から，忍耐強い労働によって，かぼそい生計費を絞り出したのだ。彼はまた自分の服をぬいで町から町へと商品を売り歩くこともやった。彼は凡ゆる現存する社会悪を攻撃し，心身から凡ての鎖を断ち切り，黒人と白人とを同じように引き上げ，暗黒，無智，傲慢，欲望，怠惰を追いちらし，奴隷制度の笞に代うるに自由人の意志を以てし，盲目的な機械的操作に代へるに賢き特殊技術を以ってし，凡ての丘の上に学校を建てることを計画した。

次に紹介する珍客は熱烈な凝り固った偏屈な婦人伝導者である。

She sat among us, at the best,
A not unfeared, half-welcome guest,
Rebuking with her cultured phrase
Our homeliness of words and ways.
A certain pard-like, treacherous grace
Swayed the lithe limbs and drooped the lash,
Lent the white teeth their dazzling flash:
And under low brows, black with night,
Rayed out at times a dangerous light;
The sharp heat-lightnings of her face
Presaging ill to him whom Fate
Condemned to share her love or hate.

彼女は我々の中に座を占めた，ひいき目に見
ても恐しがられ喜ばれざる客である。
彼女は洗練された言葉で我々の粗野な
言葉や仕来りをなじった。
幾分豹のような，反逆的な優美さが
そのしなやかな手足をゆすぶり，まつげを
うつむけ，その白い歯にまぶしい程
のひらめきを与えた。そして夜のために
真黒な低い額の下に，時折危険な光を放った。
彼女の鋭い電光に輝く顔は
運命の女神が女史の愛情或は憎悪を
共にすることを非難した人に不吉な前兆
を示した。

A woman tropical, intense
In thought and act, in soul and sense,
She blended in a like degree
The vixen and the devotee,

思想と行動に於て，心と思慮
に於て，情熱的な激しい婦人なる
彼女は意地悪女と熱心家の
性質を同程度に交えていた。

At last the great logs crumbling low,
Sent out a dull and duller glow,
The bull's-eye watch that hung in view,
Ticking its weary circuit through,
Pointed with mutely warning sign
Its black hand to the hour of nine.
That sign the pleasant circle broke:
My uncle ceased his pipe to smoke,
Knocked from its bowl the refuse gray,
And laid it tenderly;
Then roused himself to safely cover
The dull red brands with ashes over.
And while, with care, our mother laid
The work aside, her steps she stayed
One moment, seeking to express
Her grateful sense of happiness
For food and shelter, warmth and health,
And love's contentment more than wealth.

遂に大きな丸太はくづれて低くなり，
次第に鈍い光をはなった。
見える所に懸っていた牛の目のような時計は
かちかちとものうげに進みゆき，
物言わねど警告の合図を以て
時針を九時の刻に向けた。
その合図に楽しい集いもやぶれた。
叔父はタバコを吸うのを止め，
火ざらから灰色のくずを叩き落して
パイプを静かに片づけた。
それから立ち上って鈍い赤い燃えさしを
灰を以て安全に埋めた。
母は注意して仕事を片付け
一寸足を止めて，与へられた食物と住居と，
暖さと健康と，富にまさる
愛の満足とに対して
心からの幸福感を披歴した。

寝床の中でも暫くは破風をめぐって吹きすさぶ風の音が聞えた。時折り寝台をゆり動かす程の激しい動揺が感じられた。

次の朝高くすんだ楽しげな叫びに目をさますと，連獣の御者達が道路にふり積った雪を除くために近づいて来るのが見える。半ば雪に埋もれた牛達は頭の雪を振り落そうとしていた。戸口では少女等がもの珍らしげに此の様子を見ていると，獣を御する若者達から急に雪のつぶてが飛んできた。少女等は両手をあげて之を防ぐ格好をする。

最後に新聞配達人が，のたうつような足どりで村の新聞を配布して廻る。家族達は此を読むにつれて，地平線がずっと温い地帯へ拡がってゆくのを感じる。

Shut down and clasp the heavy lids;
I hear again the voice that bids
The dreamer leave his dream midway
For larger hopes and graver fears:
Life greatens in these later years,
The century's aloe flowers to-day!

重き瞼をかたく閉じると私は
命じたもう御声を再びきく，夢見る者に
より大いなる希望と厳かなる恐れの為めに，
彼の夢を中途にして離れよと命じ給う御声を。
人生は晩年に至って増大する，
世紀の蘆薈の花は今こそ開く！

こゝに至ってWhittierは一世紀に一度咲くと云う蘆薈のイメージを用いて，奴隷制度を根絶すべき奴隷解放論者の目的が今こそ見事に花を開くのを劇的に描き出している。

Yet, haply, in some lull of life,
Some Truce of God which breaks its strife
The worldling's eyes shall gather dew,
  Dreaming in throngful city ways
Of winter joys his boyhood knew;
And dear and early friends—the few
Who yet remain—shall pause to view
  These Flemish pictures of old days;
Sit with me by the homestead hearth,
And stretch the hands of memory forth
To warm them at the wood-fire's blaze!
And thanks untraced to lips unknown
Shall greet me like the odors blown
From unseen meadows newly mown,
Or lilies floating in some pond,
Wood-fringed, the wayside gaze beyond;
The traveller owns the grateful sense
Of sweetness near, he knows not whence,
And, pausing, takes with forehead bare
The benediction of the air.

然しながら人生の休息のひと時，
その争ひを中断する神の戦闘休止の間
に於て，名利を追う者も目に涙を浮べ，
巷の雑踏にあるも，少年の頃の
冬の喜びを夢みることもあろう。
その懐しい昔の友達一今残るものは
僅かであろうが一は皆とどまって
懐しい時代のフランドル派の画を見るだろう。
わが家の炉辺に私と共にすわり
思い出の手をさしのべて
薪の燃ゆる焔に手を暖めよ！
見知らぬ人の唇にそこはかとなく浮ぶ
感謝は，見えざる牧場からの刈りたての
草の香り又は路傍からは見るよしもない
彼方の森の辺の池に浮ぶ睡蓮のほのかな
香りのように，私をむかえるだろう。
旅人は近くはあれど，どこからとも知れず
漂ひくる香りに感謝をおぼえる，
そして立ちどまってあらわな額を以て
大気の祝福をうける。

む す び

Whittier はニユー・イングランドの田園に生れ田園に育ちニユー・イングランド人として一生をすごした。彼は寛容の精神にとみ何人に対しても親切であったが，不正に対しては激しい憤りをもらした。是と信ずることに対しては結果の如何を顧みず前進する人であった。熱心なるクエーカー教徒であったことも忘れてはならない。少年時代スコットランドの詩人 Robert Burns の詩に触れたことは，彼の生涯に於ける特記すべき出来事であった。

熱心な改革者 Garrison に導かれて彼は奴隷解放運動に参加し，働き盛りの壮年期の三十年をこの運動に捧げたことも意義深きことであった。奴隷解放運動が終結するや，彼は専ら詩作にふけり「雪ごもり」，「久遠の愛」の如き傑作を遺してアメリカ文学に不朽の名を止めるに至った。Emerson はアメリカの哲学的思想を彼の詩の中に具現したように，Whittier はその普遍的理想と伝統を彼の詩の中に具体的に表現した。彼は晩年に於て次のような告白をしている。

「私はすぐれた詩人の一人ではない，又詩人を気取りはしない。神の恩寵によってやっと今日あるを得ました。私はこれ以上の態度を採ることを望まない。」

"I am not one of the master singers and don't pose as one. By the grace of God, I am only what I am, and don't wish to pose as more."(16)

彼は民衆詩人として1892年 9 月 2 日 New Hampshire に於て85年の生涯を閉じた。臨終に際して彼の唇からかすかにもれた言葉は「愛—全世界への愛」であった。

NOTES

(1) *John Greenleaf Whittier* by John Pickard, p.8
(2) Do. p.11
(3) *John Greenleaf Whittier* by Lewis Leary, p.71
(4) Do. p.75
(5) Exodus 15:1 20 Then sang Moses and the children of Israel this song unto the Lord.
(6) Exodus 15:20-21 20 Then Miriam, the prophetess, the sister Aaron, took a timbrel in her hand; and all the women went out after her with timbrels and with dances. 21 And Miriam answered them, Sing ye to the Lord, for he hath triumphed gloriously; the horse and his rider hath he thrown unto the sea.
(7) Psalms 76:10 Surely the wrath of man shall praise thee.
(8) The Sermon on the Mount Matt. 5, 6, 7 and Luke 6:20-49
(9) Bethesda. Biblical pool believed to have curative powers. (John 5:2-4).
(10) Romans 10:6-7
'But the righteousness which is of faith saith thus, Say not in thy heart, Who shall ascend into heaven? (that is, to bring Christ down:) 7 or, Who shall descend into the abyss? (that is, to bring Christ up from the dead.)
(11) See Matt. 26:30-46 where the disciples' faith was severely tested.
(12) See John 21th Chapter where Peter's love for Christ was tested.
(13) See Matt. 9:20-22 and Luke 8:43-48.
(14) Do.
(15) Isaiah 42:3 A bruised reed will he not break.
(16) *John Greenleaf Whittier* by Lewis Leary, p. 169